

アトリエ 琉游舎 だより 231号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2026年5月20日発行

琉游舎九歳の誕生日

- 5月20日で琉游舎は九周年を迎えました。周年の恒例により今回も数字にまつわるお話です。
- 日本では数字の「9」というと、発音が「苦（く）」を連想させることから、一般的にはそれほど好まれる数字ではありません。ホテル等の部屋番号も「死（し）」を連想させる「4」とともに、「9」という数字が一桁につく部屋番号を避ける傾向があるようです。「49」という数字は、「死苦」「始終苦」「轢く」を連想させて縁起が悪いことから、車のナンバープレートの下2桁に通常は使用されません。ところが中国では、「九」は「永遠」等を連想させる「久（ジュ）」と発音が同じことから、縁起の良い数字として好まれています。
- 第九の呪いという言葉があります。クラシック音楽の作曲家の間で囁かれていたとされる、「交響曲第9番を作曲すると死ぬ」というジンクスです。実際に「交響曲第9番」作曲と前後して死去した主要な作曲家はベートーヴェン、ブルックナー、マーラー、ヴォーン・ウィリアムズなど、また数え方によってはシューベルトやドボルザークも九曲で亡くなっています。
- ところがソ連の作曲家ショスタコーヴィチは15曲の交響曲を残しました、死後50年を経て今ではどれもが頻繁に演奏されている曲ばかりです。スターリンの圧政時代に活動した彼は、**四番と九番**の交響曲を書いたことで、スターリンの考える音楽に反した反共産主義的音楽のレッテルを貼られ粛清されそうになりました。銃殺刑の恐怖にさらされ続けていたのです。まさしく、彼は第九の呪いだけでなく、四(死)の恐怖、生老病死の四苦に晒されていました。
- それぞれの言語の発音が意味と結びついてしまうことからその数字を語ることは、数字の本質ではありませんが、「9」という数字が結果的には何らかの影響を及ぼしたから、人々は「9」や「4」を不吉な数字、「8」や「7」を幸運な数字と語るのでしょうか。縁起担ぎ、こじつけ、言葉遊びと言われればそれまでですが、それでもきっかけとして、何らかの心構えや、行動に結びつくのであれば、それもあながち無意味とは言えないのではないのでしょうか。
- 数字談義はさておき、九年間琉游舎が続いたことをここに素直に喜び、ご報告いたします。

写経会 6/7 (日) 13時半 読書会 5/26・6/9 (火) 13時半

自然豊かな土地では、散歩をしていると名前の知らない花や鳥の鳴き声ばかりです。家に戻って記憶を呼び覚まし、辞書を頼りに一生懸命調べるか、そんな労力は無駄と諦めて知らないままに放っておくか、どちらのタイプかと言えば、私は間違いなく後者です。そしてまた散歩の時にこの花の名前は何だろう、あの鳥の鳴き声は変わっているがどこからやってきたのだろうとの思いを繰り返すだけです。好奇心はあってもそれを地道に調べて突き止めたいという学究肌ではないことは間違いなさそうです。それでも琉游舎の書棚には父が買いそろえていた植物や昆虫など生物の図鑑全集のほか、種々の辞典類、百科事典、国語や漢和の大辞典集などの辞書類が、20桶は下らない漬け物樽の重石になりそうなだけの重量で書棚に鎮座しています。

経文を読み始めた15年ほど前の頃は、漢字や言葉を調べるために大辞典類はまだ重宝でした。AIもネットの写真検索で即座に答えてくれるような機能もなかったので、地道に辞書を引く方が答えを得ることができていたのです。しかしいつの間にかスマホに検索カメラの機能がついてきました。グーグルレンズの機能を使うと無料で即座に花の名前も生態も教えてくれます。専用アプリで鳥の声を入力すると即座に名前でもなんでも教えてくれます。瞬時に知ったことは、忘れるのもあつという間です。後日同じ道を通った時、忘れてしまった花の名を再びスマホに聞いてみるのか、またどうせ忘れるのだからと素通りするかのどちらかです。苦労や努力なしで知ったことは、あつという間に忘れて身につかないということなのでしょう。

現在琉游舎の読書会は、4名のメンバーで法然聖人の「選択本願念仏集」を読んでいます。この書は日本の浄土思想の拓がりの原点となり、鎌倉仏教という仏教の民衆化の端緒となった書です。現在の浄土宗、浄土真宗の始原の書です。一方私の属する宗派の宗祖日蓮聖人は、彼のほぼ処女作となる「守護国家論」でこの法然の著作を謗法の書として厳しく批判しました。法然の語る浄土の教えは浄土三部経(無量寿経、観無量寿経、阿弥陀経)の經典や念仏以外の修業を「捨てる」「閉じる」「閣(お)く」「抛(なげうつ)」の「捨・閉・閣・抛(しゃへいかくほう)」したため、これまでの既存仏教の修行体系や聖典を否定する主張と捉えられ大きな批判を浴び続けてきました。しかし50年後の日蓮の時代には大きな宗教勢力となっていたのです。ですから、日蓮に帰依する私は、正しい教え(正法)を軽んじ、背き、誹謗して仏の教えを妨げる重い罪の謗法の書を読書会で読んでいることとなります。謗法の書として無視し排除することはたやすいことです。しかしなぜ日蓮が大変な労力をかけて守護国家論を叙述したか、なぜ800年の時を経て選択本願念仏集は読まれ続けているのか、なぜ今日この書をよりどころとする宗派が大きな宗教的力となっているのか、それらを問うことは、私たちの信心の根底を驚掴みにする「信」の正体が何であるかを問うことなのです。

私は二つの正反対の書を読むことで、日蓮の教えの正当性を主張しようとしているわけでも、法然の考えを否定し「捨・閉・閣・抛」しようとしているわけでもありません。私はこの二つの書を今回で三度読んでいます。読む度に思うことは論理構成の緻密さと明快な主張、経律論の三論の膨大な引用による論理の客観性、どれもがすぐれて分かり易く、説得力を持って迫ってくるのです。端的に言うとも両方の書とも読んでいて何より面白いのです。読んでいて楽しいのです。読んでいてなるほどとうなずいてしまうのです。全く正反対の主張をしているにもかかわらず、その論理構成、結論のプロセス、引用の使い方がよく似ているのです。日蓮が法然の論理構成を後追いしたという見方もできますが、単なる批判の書であれば、逐一論理的矛盾を突いていけば成立するはずですが、しかし日蓮は釈尊一代の金口(経文)の評価から始まりその浅深、優劣、方便を判じた上で、それを過去の論師たちがどのように律と論で評価し今に教えとして繋がれてきたかを、丹念に追いながら法然の教えが謗法であると結論づけています。唯一論理構成の違いがあるとすれば法然は中国の浄土思想の論師から説き起こしているのに対して、日蓮は釈尊一代の金口から説き起こしていることでしょうか。なぜ日蓮はそうしたのか、それは恐らく法然の論理には逐一矛盾を突く隙がなかったからだだと思います。ですから日蓮も論理の瑕疵が生じないよう、誰もが否定できない経文から始めたのでしょう。

なぜ完璧な論理構成だと思える二つの書が、全く正反対の仏の教えを主張することになってしまうのか。これが西洋哲学ならばあり得ないことでしょう。金口を源流とした流れが枝分かれしているうちに違う所に流れ着いてしまうことはあったとしても、法然も日蓮も常に注意深く金口に戻って源流を確かめているのです。つまり二人とも源流からの正しい流れが今ある仏の教えであると語っているのです。哲学は今ある社会や文化、知識の蓄積からその思想の源流は何かと探っていく作業に思われます。源流が客観的論理的に証明されたときに初めてそれは「真」となるのでしょうか。しかし宗教に置いては、常に源流は明らかなのです。仏教のそれは歴史上の釈尊が語った言葉です。そしてその源流から流れ着いた今が、仏教にとっての「信」の根幹なのです。仏教は源流を訪ねるのではなく、源流の流れの今をくみ上げる宗教なのです。源流から流れる今をくみ取る作業、それが法然や日蓮の行なった作業です。そしてそれは「選択(せんじゃく)」するということです。法然は「選択本願念仏集」の書で彼の今における選択を世に問うたのです。

紙数が尽きたので「選択」については今後時間をかけて書いていきたいと思っています。最後にひとつ、今回のこの二つの書だけでなく、親鸞の「教行信証」にしても、辞書もコピーもない時代に、経律論の三論の書物が収蔵されている数少ない経蔵に赴いて、恐らく数年にわたって寝食を惜しんで一切経と格闘した彼らの姿が、その書物たちから立ち現れてきます。それは「信」への揺るぎのない姿です。何事も手軽に知ることのできるこの時代に、私たちは確固たる「信」を持てるのか、彼らの姿を見て不安にならざるを得ません。